

# 「青表紙本」と「河内本」について

——作中歌を中心に——

伊 東 祐 子

## 一

源氏物語には、七九五首の和歌がよみこまれているが、本稿は、それらの作中歌について本文校合をおこなった結果の報告である。以前、私は、源氏物語の引歌当該箇所について、同様に本文校合を行なった。<sup>註1</sup>そこで、その続稿として作中歌における校異を試みたわけだが、作業を始めるに当って、和歌は三十一文字という制限があるため、散文にくらべて解釈本文のおこなわれる可能性が少ないなど、異文の生じる割合は、ごくわずかであろうと予想された。予想にたがわず、異文一つひとつにみられる相違は、かならずしも大きなものとはいえないものの、源氏物語諸本すべてのなかで、何らかの異文の認められる和歌は五百首ほどみうけられ、一首に見出される異文も一箇所に限らず、その異文数は想像以上であった。とりわけ異文が目立つのは別本諸本であるが、ここでは、それらの異文をすべて網羅するのではなく、青表紙本と河内本との異同について、別本諸本をも適宜参照しながら考察を加えることにした。

なお、両本文は、それぞれの系統での善本として、青表紙本では

『源氏物語大成』の底本、河内本では「尾州家本」<sup>註2</sup>を用いる。ただし、「大成底本」と「尾州家本」の独自異文は、他の青表紙本諸本・河内本諸本によって改めた場合もある。<sup>註3</sup>

校合をおこなった結果、全部で一二首一二三例の異文が認められたが、考察するにあたっては、次の三つの区分にしたがう。

A 河内本の独自異文（別本諸本のすべてが青表紙本と同様の本文をもつ場合）。

B 青表紙本の独自異文（別本諸本のすべてが河内本と同様の本文をもつ場合）。

C その他（別本諸本に、青表紙本と同様の本文をもつものと、河内本と同様の本文をもつものがある場合。また『源氏物語大成』に別本の掲載がみられない「若紫」「明石」「落標」「松風」「藤袴」の巻の異同も含む）。

## 二

まず、Aグループについて報告するが、Aグループとは河内本の独自異文であり、別本諸本はすべて青表紙本と同様の本文をもつ

ので、河内本の本文の性格をうかがううえで大いに参考になると考えられる。このグループで認められた異文は一八首二三例であるが、そのうち本文批判の材料になるとみなされる有意の異文は一四首一九例である。以下、用例を掲げて説明を加える。(文例は、まず青表紙本の本文を掲げ、河内本との異同箇所傍線をほどこし、括弧内に河内本の異文を記す。巻名の下に漢数字は『源氏物語大成』の頁数を表わす。また、青表紙本諸本間で異同がみられる場合、河内本と同様の本文をもつ青表紙本諸本に限って『源氏物語大成』の略号を《》で囲んで示した。)

1 てをおりてあひみし事(のち)をかそふれば(かそふるに)  
これひとつやは君かうきふし《帚木五〇》

この歌は、伊勢物語第十六段「手を折りてあひみしことをかぞふれば十といひつつ四つは経にけり」を下敷とするが、青表紙本が伊勢物語の歌の上の句をそのまま引用しているのに対して、河内本は「あひみし<sup>註</sup>のちをかそふるに」と改変して引いている。この改変の理由は、伊勢の「あひみしこと」は「結婚して以来の年数」の意で、帚木のそれは「結婚して以来の数々の仕打ち」の意をつづめた表現であり、結果としてやや舌たらずな無理な表現になっているのを、より平明な表現に改めたものであることが推察できる。

2 このねも月も(菊も)えならぬやとなからつれなき人をひきやとめける《帚木五四》……《秀》

右の一首は「菊を折りて」という叙述に直接つづいていることから、「菊も」とある河内本の方が物語の内容にふさわしいかのである。ところが、もう少し前の叙述から引用すると、「律の調べは、女のもの柔らかに掻き鳴らして、簾の内より聞こえたるも、今

めきたる物の声なれば、清く澄める月に、をりつきなからず。男いたくめでて、簾のもとに歩み来て『庭の紅葉こそ跡み分けたる跡もなけれ』など、ねたます。菊を折りて」とあって、男が「いたくめでて」言葉をかけ、歌をよみかけずにはいらなかったのは、律の調べの「今めきたる」琴の音が、「清く澄める月にをりつきなからず」といった状況であったからに他ならない。そうした意味では「このねも月も」とある「大成底本」がふさわしいことになる。和歌がある植物につけて贈る場合、その植物と和歌とに何らかの関係のみとめられる場合が割合からすれば多いと思われ、手折って差し入れた菊にちなんでの「このねも菊も」という表現を、かなり前の物語の叙述をふまえて「月も」と改めることは考えにくい。一首の直前の「菊を折りて」にひかれて、「月も」が「菊も」に改められたと考えるのが自然かと思う。

3 つゝむめるなやもりいてんひきかはしかくほころぶるなかのころもに(なかのころもに)《紅葉賀一五九》

青表紙本の「なかのころも」は、直衣の下、単衣の上に着るものをさし、源氏物語では他に三例みられるが、そこでの異文はみとめられない。河内本の「なかのたもと」は他に用例がなく、意味不明の語である。この歌は、光源氏と頭中将が直衣を着る着せまいと争った結果よまれたもので、この事件の翌朝、源氏のなくなった袖が頭中将からとどけられており、河内本の「かくほころぶるなかのたもとに」が、一見すると適当のように感じられる。しかし、一首は「とかくひこじろふ程に、ほころびはほろほろと絶えぬ」につづくもので、そこでは「袖」について一言もふれていないばかりか、光源氏は翌朝になってはじめて袖がなくなったことに気づいているの

であつて、この一首で「たもと」と指定する理由がみあたらない。青表紙本、別本諸本と対立する河内本の本文は、物語の後(翌朝)の叙述とつじつまを合わせた解釈本文の可能性が大きいと考えられる。

4 君にかくひきとられぬる(ひきとられける) おひなれはかくてたえぬるなかとかこたむ(紅葉賀二六〇)

これは「ぬる」と「ける」の異同で、意味的な違いはほとんどみとめられない。ただ注意されるのは、青表紙本にしたがうと「ひきとられぬる」「たえぬる」と、一首のなかで「ぬる」が重複して用いられている点である。この異文が河内本の独自異文であることを考え合わせると、河内本が重複をきらって、「ける」に改めたと考えられなくもない。

5 あやなくもへたでけるかなよをかさねさすかになれしよるの衣を(中の衣を)(葵三二一)……(肖)

紫の上と新枕をかわした翌朝、光源氏がよんだ歌である。「よるの衣」「中の衣」のいずれの本文も、契は結ばなかったものの幾夜もいっしょに寝て着馴れた衣をさしているが、「中の衣」の「中」に間柄の意の「仲」が掛けられている河内本の方が、この場合は適切な表現である。

6 うしとのみひとへに(ひとつに) ものはおもほえてひたりみきにもぬる袖かな(須磨四二五)

青表紙本「ひとへに」は、「一途に、ひたすら」の意を表わすとともに、五句目の「袖」の縁語である「単衣」が掛け詞となっている。河内本の「ひとつに」は「へ」と「つ」の誤写であろう。

7 しらさりしおほうみのはらに(はらへ) なかれきてひとか

たにやはものはかなしき(須磨四三五)……(飯)

右の例は「大海原に」「大海原へ」というわずかな異文である。一首は「陰陽師召して祓せさせたまふ。舟にことごとしき人形ひとがたのせて流すを見たまふに、よそへられて」につづいて詠まれたもので、「ひとかたにやは」に人形が掛けられているように、河内本の「はらへ」は、歌と掛け詞になっているとも思われる。しかし「へ行く」とはいうが「へ来る」とは言わないのではないだろうか。

8 風にちる紅葉ははろし(かけし) 春の色をいはねの松に(いはつはの松に) かけて(つけて)こそみめ(少女七一)

青表紙本の「いはねの松」は岩根に生える松をさすが、河内本の「いつはの松」は五葉の松を意味する。右の一首の前後の叙述を用すると、「御返りは、この御箱の蓋に苔敷き、いはほなどの心ばへして、五葉の枝に」「この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬつくりごとどもなりけり」とあつて、青表紙本・河内本ともに物語本文と符号するといつてよい。ただし、青表紙本によると、軽い紅葉と重い岩根が対として用いられていることになるほか、河内本と同様の本文が青表紙本・別本諸本に一本もみられないことは考慮されてよい。

9 くさわかみひたちのうらの(ひたちのうみの) いかゞさきいかてあひみんたこのうらなみ(常夏八四八)……(為)(佐)

「浦」と「海」の一語の異同であるが、まず「ひたちの浦」「ひたちの海」の用例を調べてみると、「国歌大観」にはともに一例もみあたらず「平安和歌歌枕地名索引」(片桐洋一氏監修・ひめまつのか編)に「ひたちの海」を詠みこんだ歌が一首みとめられる。そこで、歌枕としては河内本の「ひたちのうみ」の方が正しいとも思わ

れるが、用例が「頼政集」の一首のみであり、歌枕としてどれだけ定着していたのか疑問も残る。かりに常陸の海が正しい表現としても、この物語本文も「うみの」とあるのが適切とは断定できない。

この歌は近江の君のよんだもので、「ひたちの浦（海）」のほか、「いかか崎」「たこの浦」と、海に関係のある各地の地名が何の関連もなくむやみに詠みこまれているなど、かなり常識はずれな一首となっており、近江の君の個性をうかがわせている。玉上琢弥氏は、青表紙本にしたがうと「ひたちのうら」「たこのうら」と「うら」を二度使っていることになって、同字の歌病をおかしたことになる<sup>註</sup>と指摘なさっているが、青表紙本の本文の場合、近江の君の個性をよりきわだたせているとも考えられる。

なお、この異同に関する諸本の状況をつけ加えると、別本諸本はすべて「ひたちのうら」、青表紙本では「大成底本」をふくめて五本が「うら」、河内本と同じ「うみ」の本文をもつ「為家本」「伝一條爲明筆・佐佐木信綱氏蔵本」の二本も「うら」とある本文に「うみ」と並記されているにすぎない。

- 10 うちきらしあさくもりせしみ雪にはさやかに空の光（空のけしき）やはみし（行幸八八八）……（池）

この一首は、光源氏からの「きのう（行幸の日）上（冷泉帝）はみたてまつりたまひきや」という消息文に対する玉璽の返事で、歌意は「一面に朝曇りした雪の日の行幸では、はっきりと空の光を見たりできましようか」となる。「空の光」とは、いうまでもなく冷泉帝のことをさすが、河内本の「空のけしき」では「帝」を指す表現とはみなせず、「空の光」とある「大成底本」が適切である。

- 11 うきことを思ひさはけはさまくにくゆる（くふる）けふり

そいとちちそふ（真木柱九四八）

河内本では「くふる」とあるが「くふる」という古語はみあたらない。「くゆる」が、「悔ゆる」と「燻ゆる」の掛け詞であることから言ってもことは「くゆる」でなければならぬ。この例の場合、河内本諸本でも「尾州家本」「高松宮家本」「鳳来寺本」が「くふる」とあるのに対し、「七麁源氏」「平瀬本」「大島本」は「くゆる」とあってばらつきがみられることから、「ゆ（由）」が「幸（布）」と写し誤まれたのかも知れない。

- 12 花の香はちりにし枝にとまらねとうつらむ袖に（袖の）あさくしまめや（梅枝九七七）

一首の意は「花の香りは、散ってしまった枝に留まりはしませんけれど、これをたきしめる（姫君の）袖に、浅くしめることがありましようか、深く残ることでしょう」で、河内本の「袖の」では文意が通らない。

- 13 風にちることは（花は）よのつね枝なからうつらふ花を（いろを）たたにしもみし（みす）（竹川一四七八）

三箇所河内本の独自異文があるが、まず四句目の「うつらふ花を」「うつろふいろを」の異同から考えよう。この一首は、基による競争の結果、中の君のものとなった桜が乱れ散るのを見て、負方の大君付きの女房が詠んだ歌「咲くと見てかつは散りぬる花なればまくるを深き恨みともせず（咲いたかと思うと、一方では散ってゆく花ですから、負けて木をこられたことを深い恨みとも思いません）」に対する中の君の返歌である。そこで、「枝なからうつらふ花」というのは、枝ごとそっくり我が方に移った花、こちらのものとなった花、を表わすとともに、色あせてゆく花の意がかけられて

いることになる。一方、河内本の「うつろふいろ」とある場合、単に、褪せてゆく色の意となり、桜争いの結果、中の君方のものとなった桜という意味がきえ、先の負方の女房の歌とびつたりかみ合わない。五句目の「みし」「みす」の異同をみると、青表紙本「ただにしもみじ」では、中の君が負方の人たちになれないでしよう」とよびかけていることになるのに対し、「ただにしもみず」の河内本では、相手への呼びかけでなく中の君自身のこととなって、意味の通らない歌になる。また、二句目「ことは」が河内本は「花は」とあるが、これは四句目の異同と関連したものとも考えられる。四句目が「うつろふ花」でなく「うつろふいろ」の河内本の場合、一首によまれた対象をはっきりさせる意味で「花」の語が必要だったのかも知れない。

14 おる人（みる人）の心にかよふはなれやいろにはいてすし  
たにゝはへる（早蕨一六七九）……（御）

右の一首は「（句宮へ）例の、御心よせなる梅の香をめでおはする。（薫ガ）下枝を押し折りて参りたまへる、匂ひのいと艶にめでたきを、をりをかしう思して」につづく句宮の歌で、「おる人」とは、いうまでもなく「下枝を押し折りて参りたまへる」薫をさしているが、河内本「みる人」では、薫をさす表現としては曖昧である。この句宮の一首に対する薫の返歌「みる人にかことよせける花のえを心してこそおるへかりけれ」で、薫は自身を「おる人」ではなく「みる人」と称していることから、河内本の本文は薫をさす表現として統一させたものと考えられないこともない。

以上、Aグループの異文一八首二三例のうち、有意異文一四首一九

例をとりあげて検討してきた。その結果、6・7・10・11・12・13の八例は「大成底本」に代表される青表紙本が適切と考えられる他1・2・3・14の五例では、前後の叙述とつじつまを合わせるなど何らかの意味で河内本の本文が改変された本文である可能性が大きかった。Aグループの異文は、別本諸本のすべてが青表紙本と同様の本文を持つため河内本の孤立性がきわだつことになるが、このグループで河内本の方がより適切ではないかとみなされた異文は、5の一例のみであった。

### 三

次のBグループは、河内本と同様の本文を別本諸本のすべてが持っている場合で、青表紙本の独自異文とみなせることから、青表紙本の本文を考えるうえに有効である。Bグループの異文は一八首一八例みとめられるが、以下有意異文八首八例について検討してゆく。

1 うはそくかおこなふみちをしるへにてこむ世もふかき契たかふな（たえすな）（夕顔二一八）

青表紙本にしたがって訳すと、下句「こむ世もふかき契たかふな」は、来世も二人の堅い約束を破らないように、と解される。河内本は「契たえすな」とあるが、「たえす」は「中途で切れるようになる」の意で、他動詞「たやす」とは異なり、意志とはかかわりなく自然に絶えてしまう状態をさすことから、この例の場合、禁止を表わす終助詞「な」とのつながりが不自然に感じられる。源氏物語中「たえす」は三例、すべて「たえせぬ」の形でみられるが、右の例のように契について用いられている箇所が一例みとめられるので参考に掲げる。

ひめ君（玉鬘）もけにあはれときゝたまふ。たえせぬなかの御契をろかなるましきものなれはにや、この君たちを人しれすめにもみゝにもとゝめたまへと（篝火八五七）

ちなみに、右の「たえせぬなかの御契」とは、血のつながった姉弟の縁を示しており、人間の意志と関わりなく、けつして切れることのない縁をさしている。

2 とはぬをもなとかととはてほとるにいかはかりかはおもひみたる（思ひわつらふ）（夕顔一四一）

「おもひみたる」は、ある対象に対してあれこれと煩悶する意を表わすことから、恋人を思つて心を乱す恋歌に多数用いられている。青表紙本によれば、右の空蟬の歌には、光源氏からの便りがとだえて久しくなったため、自分のことをすっかり忘れてしまったのかと心細く、あれこれと物思いをつづける空蟬の心境が描かれていることになり、ふさわしい。一方、河内本の「思ひわつらふ」は、基本的には、いずれかの選択にせまられて、決しかね思いあぐねる状態を意味すると考えられるが、「思ひわつらふ」を用いた歌は源氏物語には一例もみとめられず、『国歌大観』においても次の三例がみられるのみである。

春はをし時鳥はたきかまほしおもひわづらふしづ心かな（拾遺  
a・雑春・一〇六六・元輔）

春はをし人は今宵と頼むれば思ひわづらふ今日の暮かな（金葉  
・春・九五・三月尽恋の心をよめる・内大臣）

……年長く 病みし渡れば 月累ね 憂へ吟ひこととは  
a

死ななと思へど 五月蟬なす 騒く子どもを 打棄てては 死  
には知らず 見つあれば 心は燃えぬ かにかくに 思ひわ

づらひ 音のみし泣かゆ（万葉・八九七・山上憶良）

これらの三例には、いずれも傍線をほどとしたa・bという二つの対立する事柄が指摘され、その選択に「思ひわづらふ」のだが、空蟬の歌にはそうした二つの事柄はみとめられず、「思ひわづらふ」とあるのは適当でないだろう。

3 せみのはもたちかへてける夏衣（たひ衣）かへすをみてねはなかれけり（夕顔一四五）

これも空蟬の一首である。青表紙本にしたがえば、歌意は、「衣更えが終わった今、お返し下さった夏衣をみるにつけても、声をたてて泣かずにはいられませんでした」となるが、初句の「せみのは」とは、蟬の羽のように薄い夏衣を意味する。ところで、「たひ衣」の語は源氏物語中に三例みえるが、それらはすべて明石流謫に関する場面で用いられている点が注意される。右の歌によみこまれた「衣」は、光源氏が空蟬に返した小桂のことであり、方違えにかこつけて訪れた紀伊守邸で手に入れたものである。「たひ衣」の用例がすべて明石流謫に関する場面にみられることを考慮すると、京の紀伊守邸で手に入れた小桂を「たひ衣」と表現するかどうか疑問である。また、この空蟬の返歌が源氏に届けられたのは、ちょうど立冬にあたる日であり、折からの時雨が物思いをかきたてる。この一首のポイントは〈季節〉であり、「夏衣」という表現がふさわしいと考えられる。

4 みし人の雨となりにし雲井さへいと時雨にかきくらす比  
(かな)（葵三一〇）

「かきくらす比」とあっても「かきくらすかな」とあっても、一首の意にはほとんど変化はみられない。しかし、青表紙本「かきく

らす比」の場合、服喪中の光源氏が、晩秋から初冬にかけて時雨れる空を眺めながら、妻を失った悲しみに沈んで日を重ねている様子がうかがひあがってくるが、「かきくらすかな」とある河内本では、ある時に限定された空の光景としてのみ歌われていることになる。

5 なからふるほとはうけれとゆきめくり（ゆきかへる）けふはその世にあふ心ちして（賢木三六四）

河内本諸本はすべて「ゆきかへる」であるのに対し、別本諸本は「ゆきかへり」と連用形をとっているが、ここでは「ゆきめくる」と「ゆきかへる」の言葉の対立として考えてみたい。まず、青表紙本の「ゆきめくり」は、月日がひとめぐりして桐壺院の命日が訪れたことを意味する。「ゆきめくる」の用例は源氏物語中に四例みられるが、右が最初の用例で、残りの三例に異文は認められない。「ゆきかへる」も、名詞形「ゆきかへり」の一例と合わせて四例用いられているものの、それらはすべて、行き来する往復する、といった意味である。

としころあはれと思そめたりしかたにてあらき山路をゆきかへりしも、いまはまた心うくて、このさとの名をたにえきくましき心地し給へ（蜻蛉一九五六）

このように、「ゆきかへる」が往復するという意をもつことから、5の一首の場合、河内本の「ゆきかへる」は不適当であり「ゆきめくり」でなくてはならない。

6 うすこほりとけぬるいけのかゝみにはよにたくひなき（くもりなき）かけそならへる（初音七六四）……（慈）（横）

新春の六条院、光源氏と紫の上は歌をよみかわす。青表紙本「よにたくひなき」にしたがえば、光源氏が、池の鏡のような水面に映

る自身と紫の上の姿を「この世にまたとない」ものとして形容していることになる。河内本は「くもりなき」と「かゝみ」の縁語になつてはいるものの、「よにくもりなき」という表現は意味的におかしい。

7 たきゝこる思ひはけふをはしめにてこの世に（この身に）ねかふのりそはるけき（御法一三八四）

明石御方が、紫の上に答えてよんだ一首である。紫の上の詠は「惜しからぬこの身ながらもかぎりとして薪つきなむことのかなしさ」で、死期の近いことを予感し「惜しくないこの身ではあります」が、これを最後として薪がもう尽きてしまうように、寿命が尽きてしまうことが悲しく思われます」といっている。明石御方の返歌は、玉上琢弥氏によると『法花経』の「千時奉時。經千歳」をふまえたもので、青表紙本にそって訳すと「今日このような盛大な法花八講―薪くる―を催されて、この世でねがうあなたの仏法への心ははるけく、奉時して千歳を経たもうであろう。千歳の寿命をお保ちなさることでございましょう」。それに対し、河内本の「この身にねかふ」では明石御方自身のこととなつてしまつて、寿命が尽きることを悲しむ紫の上の返歌としてはそぐわない。

8 あけまきになかき契をむすひこめおなしとこ（心）によりもあはなむ（総角一五八八）……（御）

薫大將が大君に思いを訴えた歌である。「とこ」と「こころ」は誤写の可能性が強いが、一首は催馬寮「総角や」とうとう尋ばかりやとうとう離りて寝たれども転びあひけりとうとうか寄りあひけりとうとう（総角）を下敷としたもので、「離りて寝たれども、か寄りあひけり」が薫歌の下句に置き換えられている

と考えられることから「おなじところによりもあはなむ」とある青表紙本の方が適當かと思われる。

以上、Bグループの結果をまとめると、5の例では河内本が源氏物語の用法からはずれているほか、1・2・6・7も河内本の本文は不適當と考えられ、残りの3・4・8の三例は、表現としては青表紙本の方が適切であると思われた。Bグループは源氏物語諸本のなかで青表紙本の本文が孤立している場合だが、有意異文八例中すべて青表紙本の方がいろいろな意味でよりよいと判断されたことは注意してよい。(なお、以上掲げた八例中三例が「夕顔」の巻にみられるのは、『源氏物語大成』における「夕顔」の巻の別本諸本の掲載が「陽明家本」の一本のみであることと無関係ではないだろう。) 参考までに、有意異文としてとりあげなかったBグループの残りの異文をすべて列挙しておく。

なかきよのうらみを人にのこしてもかつは心を(心の)あた  
としらなむ(賢木三五三)

あひみすてしのふるころのなみたをもなへてのそらの(秋  
の)しくれとやみる(賢木三六四)

こりすまのうらのみるめの(みるめも)ゆかしきをしほやく  
あまやいかゝおもはん(須磨四一五)……(横)《肖》《三》

いつかたの雲路に我もまよひなむ(まとひなむ)月のみるら  
むこともはつかし(須磨四一九)……(池)

かしは木にはもりの神はまさすとも人ならすへきやとのこす  
ゑか(しつえか)(柏木二二六)……(横)《神》

うらみわひむねあきかたき冬の上にまたさしまさる関のいは  
かと(いは戸よ)(夕霧一三六〇)……(池)

なるゝ身をうらむる(うらみむ)よりは松しまのあまのころ  
もにたちやかへまし(夕霧一三六五)……(肖)

なかれてのたのめ(たのみ)むなしき竹かはに世はうきもの  
とおもひしりにき(竹川一四九)……(横)《陽》《三》

命あらはそれともみまししれぬ(人しれす)岩ねにとめし  
松のおいすゑ(橋姫一五四)……(肖)

かたみそとみるにつけては(つけても)朝露の所せきまでぬ  
るゝ袖哉(東屋一八四八)

#### 四

最後にCグループとして、別本諸本に青表紙本と同様の本文をもつものと河内本と同様の本文をもつものがある場合をとりあげる。このグループでは、『源氏物語大成』に別本の掲載のみられない「若紫」「明石」「潯標」「松風」「藤袴」の巻での異同も含めて、異文総数が七七首八二例と多いものの、そのうち有意異文とみなされたものは一九首二〇例で、両本文間の異同の差違は比較的小さい。以下、その有意異文について説明する。

1 あさひさすのきのたるひは(たるひも)とけなからなとかつ  
らゝのむすはゝるらむ(未摘花二二二)

歌意は「朝日さす軒のつらはとけているのにどうして氷はかたく凍っているでしょう(うちとけて契を結びながらどうして心を閉ざしているのでしょうか)」。この歌は(たるひとける)(つらゝむすはゝる)と、(たるひ)と(つらゝ)が対比されている点が重要で「たるひは」とある青表紙本がふさわしい表現であり、河内本は、「たるひも」の「も」が何をうけているのかはつきりしない。



2 ゆくかたをなかもやらむこの秋はあふさか山を（逢坂山に）霧なへたてそ（賢木三四一）

右は「山を」「山に」と二字の異同であるが、「霧が逢坂山を隔てる」のであって、「逢坂山に隔てる」という河内本の表現は語法的におかしい。

3 をちこちもしらぬ雲の（雲をを）なかもわひかすめしやとの木すゑをそとふ（明石四五八）

玉上琢弥氏は、「雲の」を「雲のいる所、空のことだが、ここでは遠い処の意」<sup>註9</sup>と解釈なさっている。そこで「をちこちもしらぬ雲」とは、都から遠く離れた異郷「明石」をさすと考えられ、青表紙本の上句は「遠くとも近くとも分らない土地で、物思いにふけてわびしく暮らしている」という意になる。一方、「雲ををなかもわひ」では、「雲の」とは単に「空」を意味し、その「空をなかもわびしく暮らしている」といった内容となろうが、「空」の形容として「をちこちもしらぬ」は意味的にそぐわない。

4 なかもむらんおなし雲のをなかもは思ひもおなし思ひなるらむ（思ひなるへし）（明石四五九）

「らむ」と「へし」の異同で、歌意はほとんど変わらないが、青表紙本にしたがうと一首のなかで「らむ」が重複して用いられていることになる。しかし、この異同と同趣の異文がAグループの3にみられることから、この例も河内本が重複をきらった結果と考えられまいだろうか。

5 わたつみにしなへうらふれ（しつみうらふれ）ひるのこのあしたゝさりし年はへにけり（明石四七六）……（横）（陽）（肖）

（三）

この「しなへうらふれ」と「しつみうらふれ」の異同の場合、青表紙本諸本のなかでも「しなへうらふれ」とあるのは「大島本」「池田本」のみで、残りの四本は河内本と同じ「しつみうらふれ」の本文をもつ。また、「明石」の巻は『源氏物語大成』に別本の掲載がみられないため河内本「しつみうらふれ」の本文が多数を占めていることになる。なるほど「しつみうらふれ」の方が分かりやすい表現であり、「しなへうらふれ」は聞きなれない表現のように感じられる。ところが『国歌大観』を調べると、「しつみうらふれ」という歌句が一例もみられないのに対し、「しなへうらふれ」の歌句を持つ歌は「万葉集」に二首「風雅集」に一首みとめられる。もっとも「風雅集」と「万葉集」の一首は同一で、「君に恋ひしなえうらふれ我が居れば秋風吹きて月傾きぬ」（風雅・二二八八、万葉・二二九八）であるが、そこでの「しなえうらふれ」は、うちしおれ悲しみに沈む意をあらわしており、右の明石の一首の場合にもふさわしい。「しなへうらふれ」は青表紙本の諸本に少数みとめられるのみであるが、一概に不適当とみなすことはできない。

6 みしはなくあるはかなしき（はかなき）よのはてをそむきしかひもなく／＼そふる（須磨四〇八）

藤壺の歌である。青表紙本によれば、初句の「みしはなく」とは連れ添っていた桐壺院の死を、つづく「あるはかなしき」は光源氏の須磨流謫という悲運の状態をさす。河内本は「あるはかなき」とあるが、「はかなし」の意は、①これといった内容がない。ちゃんとしたところがない。とりとめない。②手ごたえがない。頼りない。むなし。③あっけない。④みじめで情ない。（岩波『古語辞典』）で、光源氏の悲運をさす語としては、しっくりしない表現と

いわざるをえない。河内本では、「はかなき」を光源氏の悲運をさし示す語というよりも、「はかなきよ」として、漠然と無常の世といった意味をもつ表現とうけとっていたのかも知れない。

7 うちつけのわかれをおしむかことにておもはむかたに（おもはぬかたに）したひやはせぬ（落標四九〇）……《横》《平》

光源氏は明石へ乳母を派遣するが、明石への出立の日、乳母となる宣旨の娘のもとを自ら訪う。右の一首は、光源氏の「かねてより隔てぬなかならねど別はれをしきものにぞありける 慕ひやしなまし」に対する宣旨の娘の返事である。上句「うちつけのわかれをおしむかことにて」は、光源氏歌の内容を、下句は源氏の歌につづく言葉「慕ひやしなまし」をうけている。青表紙本と河内本とは「おもはむかた」「おもはぬかた」と正反対の表現になっており、諸注は青表紙本によって「おあいしたばかりの私、お別れするのをおしいとおっしゃるのはかこつけで、恋しいお方の所にお行きなさいませんか（じつは思ってお方をお慕いになるのではございませんか）」と解しているが、いささか苦しい解釈である。河内本では「須磨のあまの塩焼くけぶり風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」（伊勢物語・古今集）を下敷にして、お逢いしたばかりの私とのにわか別れを惜しむとはかこつけごとで、「おもはぬかた（思ってもみなかった思いがけない方向）」にお慕いなされではありませんか、と光源氏に対して切りかえしているのである。

8 なき人をしたふ心にまかせてもかけみぬみつ<sup>註10</sup>のせにや（みつ<sup>註11</sup>のせきや）まとはむ《朝顔六五八》……《為》

「大成底本」の「みつ<sup>註10</sup>のせ」とは、三つ瀬川の瀬のことで、三途の川のほとりの意を表わす。亡くなった人はこの三途の川を渡らな

ければならないが、当時、死者が「女だと、はじめての男が背負って渡ることになっている、という俗信があった<sup>註12</sup>」という。この一首は〈なき人〉―藤壺を慕う光源氏の独詠であるが、「藤壺だと桐壺帝が背負って渡ってしまったてはるはずであるから『かけ見ぬみつの瀬にやまどはむ』といったのであ<sup>註13</sup>り、『みつ<sup>註10</sup>のせにや』という表現は、この一首で大切な言葉と考えられる。河内本の「みつ<sup>註10</sup>のせきや」は意味の不明な表現で、おそらく「ふ（爾）」と「ま（支）」の語写であろう。

9 入日さすみねにたなひくうす雲はもの思ふ袖に色や（いろそ）まかへる《薄雲六一八》

藤壺の死の悲しみに閉ざされている光源氏にとって、薄雲の色を単なる灰色と眺めることはできない。その薄雲の色は、すぐに我が身にひきつけられ、もの思ふ袖、死を悼み哀しむ自分の喪服の鈍色と見まがうばかりではないかと思う。河内本の「いろそまかへる」は、単に薄雲の色は喪服の色と同じだというだけで、光源氏の悲傷の心情が脱落する。

10 かけきやはかはせのなみもたちかへり（立かはり）君かみそき<sup>註14</sup>のふちのやつれを《少女六六五》

「かはせのなみもたちかへり」とは、「斎院の御禊の日がふたたびやってきて」の意を、加茂川原でおこなうみそぎであることからこのように表現したもので、「たちかへり」は、川浪が寄せ返すことと、月日がふたたびやってきたことの両意を表わす。一方、「立ちかはり」は源氏物語中四例みとめられるが、それらはすべて「誰かに代わって誰かが」という意味で用いられている。

子のおとなふるにおやのたちかはりしれゆくことは《少女六七

三

三日すこしてうへ（紫上）はまかてさせ給。たちかはりて（明石御方ガ）参りたまふたいめんあり（藤裏葉一〇一〇）

「たちかはり」と「立かはり」とは、わずか一文字の違いではあるが意味はまったく異なっており、右の一首の場合、河内本の「立かはり」はふさわしくない。

11 唐衣又から衣からころもかへすくも（返くそ）から衣なる  
 〈行幸九〇四〉……（池）（首）（三）

一首の結句が「から衣なる」と連体形であることから、「返くそ」とある河内本の方が係り結びの法則によっていることになるが、連体形終止をもつ和歌も少なくはなく、いずれの本文であっても大差はない。ただ、この歌は末摘花への光源氏の返歌で、三十一文字の中に「からころも」の五文字が四回用いられているなど、末摘花をからかった軽んじた歌だが、青表紙本にしたがうと「カラコロモ、マタカラコロモ、カラコロモ、カヘスくモ、カラコロモ、ナル」と（ヘモン）音が連続し、軽妙なリズムによって、より茶化した冷やかした気分が増していると思われる。

12 ことならはならしのえたに（やとに）ならさなむはもりの神  
 のゆるしありきと（柏木一二六）……（横）（神）（陽）

夕霧が、未亡人となった落葉宮にむかって恋情をほめかした一首である。一見するとわかりにくい「ならしのえた」という「大成底本」の表現にくらべ、河内本「ならしのやと」は親しく慣れた宿の意とも考えられるが、夕霧は「柏木と楓との、ものよりけに若やかなる色して枝さしかはしたる」情景に恋心を触発されてこの歌をよむのであり、「ならしのえた」という表現は、眼前の柏木と楓の

さし交わした枝をさすとともに『源氏物語評釈』（角川書店）『日本古典文学全集・源氏物語』（小学館）によると連理の枝を意味する表現で、一首のよまれた状況と密接に関わっておりふさわしい。

13 夏衣たちかへてけるけふはかりふるき（ふかき）思ひもすゝ  
 みやはせぬ（幻一四一四）……（池）

まず「ふるき」と「ふかき」は一字の違いであり、「る（留）」と「る（可）」の写し誤りが考えられる。ところで、「ふるき思ひ」「ふかき思ひ」はともに今は亡き紫の上に対する光源氏の追慕の情をさす理解され、いずれの本文であっても一首の内容に変化はみられない。しかし、この歌は衣更えにあたってよまれたもので、新しい夏衣とふるい（以前からの）思いとが意識的に用いられていると考えられ、表現としては「ふるき」の方が適当かと思う。

14 物おもふとすぐる月日もしらぬまに年もわか世も（わか身も）けふやつきぬる（幻一四二三）

紫の上を失った悲しみのうちに、この一年も暮れようとしている。青表紙本「わか世もけふやつきぬる」という表現は、年明けの出家への決意が、自分の人生の終わりを認識させたことから生まれた表現と考えられる。河内本では「わか身もけふやつきぬる」とあるが、河内本のように、光源氏は今日自分の寿命が尽きてしまうと思っていないのではないだろう。

15 さくとみてかつはちりぬる花なればまくるを（まくるに）ふ  
 かきうらみとも（うらみしも）せず（竹川一四七八）

河内本の「ふかきうらみしもせず」の「うらみ」は名詞と考えられるが「うらみせず」という言い方があるだろうか。

16 手にかくる物にしあらは藤の花まつよりまさる（こゆる）色

をみましや〈竹川一四八六〉……〔陽〕〔宵〕

右は、内心思いを寄せていた大君が、冷泉院に嫁してしまつたことを惜しんで、薫大将のうたったものである。歌中の「藤の花」とは、松に藤の花が咲きかかつている光景にならずえ、大君をさす、一首の意は「手にとれるものなら、あの藤の花の、松よりまさっている美しい色を、ただこうして眺めていたりしましようか」となる。「大成底本」の「まつよりまさる」の箇所が、河内本では「まつよりこゆる」とあるが、それによれば「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」（古今・東歌・一〇九三）をふまえ、藤の花が「藤波」ともたとえられることから、その縁で「こゆる」と表現したものとも考えられる。しかし、この古今集歌は「あなたをさしおいて浮気な心を私が持つならば、あの末の松山を、越えるはずのない波も越えてしまふでしょう」の意で、薫歌とは一致しないことから引歌としての表現効果は薄く、こうした表現をわざわざ用いる必然性がみとめにくいように思われる。

17 なくくもはねうちきする（うちかはす）君なくは我そすも  
りになるへかりける〈橋姫一五一〉

幼い中の君がよんだ一首で、歌意は「泣きながらも羽も着せてくれる父君がいなければ、私はいえることもできない卵になっていたことでしょう」である。河内本の「はねうちかはす」という表現は、比翼の鳥として、夫婦・恋人同志の仲むつまじい様を暗示した言葉と考えられるが、この例では父と子の関係を詠んでいることから「はねうちきする」の方が適当だろう。

18 雪ふかき汀のこせり（せりも）たかためにつみかはやさんお  
やなしにして〈樞本一五七八〉

「こせり」と「せりも」の異同であり、意味的な違いはほとんど認められない。ただし、かりに「湖月抄」の「おやなしにしてといはんためにこ、岸とよめり」にならうならば、青表紙本の「こせり」の方が細やかな表現と考えられる。

19 身を投げむ涙の川にしつみてもこひしきせゝに（せゝは）  
わすれもしもせし〈早蕨六八七〉

亡くなってしまつたがゆえに、薫にとって大君はいよいよ忘れがたい。下句「こひしきせゝにわすれしもせし」は、恋しい折々に（大君を）忘れはしないだろう、の意と解されるが、「せゝは」とある河内本では「わすれしもせし」の目的語が「こひしきせゝ」となってしまう。

以上、Cグループの有意異文一九首二〇例をとりあげてきたが、2・8・10・15の四例は河内本の本文に欠陥があると認められた。そのほか、1・3・6・9・12・13・14・17・18・19の諸例では、明らかに青表紙本の方がきめの細やかなそれぞれの一首にふさわしい表現であったということが出来る。そして、わずかに7の一例が、河内本の本文が適当であると判断された。

## 六

さて、以上、源氏物語の作中歌における青表紙本と河内本の異同一二首一二三例のうち、有意異文として四一首四七例をとりあげ、さらにそれらを三グループに分類し比較考察をおこなってきた。考察の結果をまとめると次のとおりである。

一、有意の異文合計数四七例のうち、何らかの意味において青表紙本がよいと判断されたものが全部で三五例みられるのに対

	C	B	A	異文総数	有意の異文数	〈青〉がよい異文数	〈河〉がよい異文数
123	82	18	23				
47	20	8	19				
35	14	8	13				
2	1	0	1				

し、河内本がよいとみなされたものは二例である。(河内本の異文には、語法的に誤まっていたり語義をとり違えているといった明らかなまちがいがいも少なからずみうけられた。)

一、独自異文は、青表紙本に一八例(右表B項)、河内本に二三例(右表A項)で、河内本に五例多いが、それぞれの独自異文にみとめられる有意の異文数は、青表紙本が八例、河内本が一九例とあって、河内本は青表紙本の二倍強となっている。(これは、青表紙本の独自異文が比較的小さな異文を多く含んでいることを示すものと考えられよう。)

一、また、青表紙本の独自異文の場合、有意異文八例はすべて青表紙本の方がよりよいと考えられるのに対し、河内本の有意の独自異文一九例のうち河内本の本文がよりよいと判断されたのは、わずか一例である。

七九五

こうした結果から、作中歌八七五首に限っていえば、「大成底本」に代表される青表紙本の本文の方が信用のおける本文ということができると思う。そして、この結果は、引歌当該箇所における校異の結果——河内本にくらべ青表紙本の方が、源氏物語のこまやかな引

歌表現を残しているという点で、すぐれた本文であると考えられる——と、同一線上にあるとみなせるだろう。

註1 「青表紙本と河内本について——引歌当該箇所を中心に

——」(学習院大学「国語国文学会誌」第25号、昭57・3)。

註2 『源氏物語大成』に「尾州家本」の掲載がみとめられない「松風」の巻は、他の河内本諸本に拠った。

註3 「大成底本」の独自異文(1)なひかぬ(大成底本)——な

ひかん(他の青表紙本諸本)(一八一)『大成』頁数。⑬「同行数」。(2)したかへのつまーしたかひのつま(二九九⑥)。(3)おほふかたのーおほかたの(三六七⑪)。(4)あさみとりにやーあさみとりとや(六九三⑭)。(5)うちきえしーうちきらし(八八八⑩)。(6)しらすーしらて(九二七④)。(7)しら露ーあさ露(一四一九⑩)。(8)とよのあかりとーとよのあかりに(一四二〇⑧)。(9)なりははてましーなるへかりける(一五一一⑭)。(10)たのめしをーたのみしを(一七四五①)。(11)立かくすーたちかくる(二〇三七⑭)。

「尾州家本」の独自異文(1)わかたは(尾州家本)

ーわかたは(他の河内本諸本)(二九六②)。(2)いつしかとーいつしかや(四九〇⑫)。(3)あさかほのはえーあさかほのはな(六四四①)。(4)かすめへたてはーかすみへたては(九六二①)。(5)いとことかーいつことか(一五七八⑩)。

註4

中川正美氏は「源氏物語の文章——和歌の周辺から見た」(『平安文学研究』昭54・6)のなかで、源氏物語作中歌一九五首における青表紙本(『源氏物語大成』底本は大

島本。但し花散里、御幸、柏木、早蕨は定家本。桐壺、初音、浮舟、夢浮橋は池田本」と河内本（「尾州家本」武蔵野書院）との異同が六九首であると指摘なさっている。しかし、同様に私が『源氏物語』大成の底本と「尾州家本」（『源氏物語大成』所収）との異同を調査した結果は一二一首一二三例のとおりである。

註5 この解釈については吉岡曠先生からのご教示による。なお、以下、Aグループ5「よるの衣を（中の衣を）」、Aグループ13「みし（みす）」、Cグループ7「おもはむかたに（おもはぬかたに）」の諸例の異同に関しても、吉岡先生からご教示いただいた。

註6 以下、説明文中における源氏物語本文の引用は『日本古典文学全集・源氏物語』（小学館）による。

註7 玉上琢弥氏『源氏物語評釈』（角川書店）、第五卷、四一四頁。

註8 同右、第九卷、四二頁。

註9 同右、第三卷、二〇二頁。

註10 同右、第三卷、二八三頁。

註11 『日本古典文学全集・源氏物語』（小学館）、第二卷、二七九頁。

註12 玉上氏『源氏物語評釈』、第四卷、三〇八頁。